

北タイ班

タイ北部の山地農民ミエン（ヤオ）における狩猟活動
- 野鶏猟とイノシシ猟の事例 -

池谷和信（国立民族学博物館）

キーワード：野鶏、イノシシ、狩猟、山地農民、ミエン

Hunting among the Mountain Farmers Mien(Yao) in Northern Thailand
:A case study of wild chicken hunting and wild pig hunting

Kazunobu Ikeya (National Museum of Ethnology)

Keywords: wild chicken, wild pig, hunting , mountain farmer, Mien

要旨

本報告では、タイ北部の山地に暮らす農民の狩猟活動の実態を、とくに野鶏猟とイノシシ猟に注目して、生態人類学の視点から把握することを目的とする。現地調査は、2005年11月上旬、2006年3月下旬および5月上旬におこなわれた。その結果、タイ北部の山地農民にとって、イノシシ猟は、農地に隣接する地域での害獣駆除を目的とした側面のみならず、村人の多くが参加するという社会的側面、捕獲後に必ず儀礼がともなうという信仰的側面という役割を無視できないことがわかった。その一方で野鶏猟の場合には、単独でおこなわれており、儀礼がともなうことはない。両者とも、その多くの活動は集落や農地に近接した地域で行なわれているものであり、現在においても村社会のなかに深く根付いた生業活動であることが明らかになった。

1 はじめに

世界の熱帯では、各地の自然環境や技術の歴史の違いに応じて、弓矢猟、吹矢猟、犬猟、網猟、罟猟、騎馬猟、落とし穴猟などさまざまな狩猟が行われてきた。また、狩猟の担い手が、狩猟採集民であるのか農耕民であるのかによって、生活のなかでの狩猟の位置づけだけではなく狩猟文化の中味は大きく異なっていた。

本報告では、タイ北部の山地に暮らす農民の狩猟活動を生態人類学の視点から把握することを目的とする。筆者による現地調査は、2005年11月上旬、2006年3月下旬、5月上旬におこなわれた。

調査地は、タイ北部のパヤオ県内で、メコン川の支流であるイン川の支流域に位置している。その支流域は、ラオスとタイの国境線から西に流れる川を中心に南から北に数本の沢がみられる。これらの地域が、次節以下で紹介する狩猟活動が展開する場である。

調査地の標高は約600～1500メートルを示す、約900メートルの高度差がみられる。植生では、村の集落周辺にうっそうとした森林が自生しているが、村の大部分の土地は斜面であり畑になっている。村には、20戸26世帯のミエン Mien（ヤオ）の人びとが暮らしており、そこでの農耕を中心とした経済生活の詳細は、すでに増野が報告している（増野 2005）。

村の周辺には数多くの野生動物が生息しており、それを対象にした狩猟がおこなわれてきた。野鶏 (Red Junglefowl, *Gallus gallus*) の場合には、森の中にいるが樹高の高いところには多くなく、竹林のなかに多いという。イノシシ (Eurasia Wild Pig, *Sus scrofa*) の場合には、森に下草がないところでは、イノシシが隠れるところがなく、その生息にはふさわしくないという。本報告では、野生動物のなかで狩猟対象として最も中心的な位置を占める野鶏とイノシシに注目する。以下では、各々の狩猟技術とその実際について記述・分析をする。

2 野鶏猟の技術と実際

1) 狩猟者と技術

調査村には、2006年3月下旬現在、野鶏を対象にした狩猟者が7名いる。彼らはすべて20歳代から30歳代の村在住の男性である。狩猟方法では、笛(注1)か「おとり」(カイトーン)を使い獲物をおびき寄せた際に銃で撃つという人がほとんどである。例えば、狩猟者のひとりのニコム氏の場合、同じ狩猟者であるチューチャン氏のおとりを借りて、おとり猟をしていることから、おとりの貸し借りがみられる。村には、おとり用のニワトリを飼育している人が5名ほどいるが、彼らすべてが狩猟の際にそれぞれのおとりを使っているわけではない。また、1名のみ最近習得したという罠の使用者(センワー氏)がいた。

例えば、聞き取り調査によって得られた次のような事例によって、おとり猟の実際をみてみよう。

*【事例1】【2006年3月25日】

前日の道路工事の際に、野鶏が鳴いている声を聞いた。このため翌日の早朝5時ごろに猟に出かける。笛を使ったら野鶏が寄ってきたので散弾銃(灰色の弾は小粒で自家製)で撃つ。なお、ここで使用した笛はナン県ムーナン(ヤオの村、妻の村)で購入したという。笛がよくないと野鶏は近づいてこないという。

この事例から、猟師は野鶏を探索してから猟をするというよりも、たまたま他の仕事の際に野鶏の存在を確認したので、狩猟を行なっていることがわかる。また、猟の時間帯は早朝であり、他地域から購入された笛であっても猟の際に役に立っていることが理解される。

2) 猟場の利用

まず、野鶏猟は、村人にとっての農閑期であると同時に、野鶏の鳴き声を聞くことのできる繁殖期の2-4月頃に実施される。また、2006年2-3月における野鶏の捕獲地点は、集落から北、西、南の方向にみられ、約2km以内に認められる(図1)。猟師は、集落からすべて徒歩で行く場合とオートバイを部分的に使う場合とに分かれる。さらに、各猟師別に特定の猟場(テリトリー)を持っているわけではない。上述したように、自分の畑での農作業の際に、野鶏の鳴き声を聞いたのをきっかけにして野鶏を捕獲した事例が多くみられる。

その一方で、2006年2-3月における狩猟者ごとの狩猟法や捕獲頭数を示す。まず、狩猟法では、上述したように笛を用いる方法がもっとも頻繁にみられる。次は、オトリを使う猟であり、罠の利用は1名のみであった。また、1人当たりの野鶏の捕獲頭数は0-8頭というように狩猟者によって大きく異なっているが、1-3頭の人が多い。捕獲した野鶏は、オスが中心であるがメスの野鶏も含まれることに注意しよう。

3) 獲物の解体、分配、調理方法

獲物の解体は、捕獲場所よりは村の捕獲者の家の軒先で行なわれることが多い。しかし、解体する人は必ずしも捕獲する人であるとは限らない。また、肉の分配は肉の量が少ないということもあって、家のなかで行なわれることが多い。

さらに野鶏の調理では、捨てる部位はなくすべてが利用される。まず、羽をむしられた獲物は、すぐに利用しない場合には冷蔵庫にいれられる。次に、足のももや胸の生肉は、板の上で包丁でたたかれてミンチにされる。その後、そこに葉を入れる。そして、ミンチに火をとおす。骨のほうは、湯であげてから水を加える。トウガラシ、味の素なども忘れないで入れる。一方で、内臓は油であげる。最後に、ミンチ、骨、内臓など、すべてをいっしょに混ぜ合わせる。

3 イノシシ猟の技術と実際

1) 狩猟者と技術

イノシシ猟の場合は、個人猟とともに集団猟でも行なわれるために、村の成人男性のほとんどがその狩猟に関与することになる。しかし、集団猟の際には銃の保持の有無があり、鉄砲打ちか勢子かの役割の違いが認められる。例えば、3月26日午前の巻き狩りの参加者は、17人が村の人で、3人が村外の人であった。13人が銃を



図1

2006 年において野鷲やイノシシが捕獲された場所 野鷲 ×イノシシ 対象集落

保持して7人が保持していなかった。村の人のなかには1軒の家から2人でている家が4軒あり、猟にまったく参加しない家もみられた。村外の人、いずれも集落の近くに事務所のある森林局作業員であった。

一方で、狩猟技術は、季節によって変わるイノシシの生態に応じて異なっている。まず、イノシシが畑の収穫物を荒らす8～9月では、畑の中での待ち伏せ猟が行なわれる。調査地には、待ち伏せのための見張り台に2つのタイプのもが存在すると確認できた。畑に木を組んで待ち伏せ台を新たに建設するタイプと（写真1）、すでに存在している木の上を待ち伏せ台にする場合とである（写真2）。両者は、畑にある場合もあるが森と畑との境界に位置することも多い。また、上述した野鷲の狩猟の場合と同様に、農閑期となる1～4月にイノシシ猟がおこなわれる。なお、イノシシの出産は3月頃である。この時期には、獲物の足跡を追跡する個人猟とある森に獲物が逃込んだことがわかると、その付近を10数人で囲い込む集団猟が行なわれる。なお、2～3人という集団で、イノシシのみを対象にするものではないが、集落から数キロ以上離れた所に行く遠征猟も実施される。この場合には、野外において2～3泊の宿泊となる。

2) 猟場の利用

イノシシ猟は、上述したように個人猟と集団猟に二分される。おのおのの猟の詳細を記述する。

(1) 個人猟

まず、集落周辺の猟場は国有地であり特定の人独占的に利用できるような占有権のようなものはない。誰でもが、自由に猟をおこなってもよい。ただ、待ち伏せをする見張り台の場合は、それを製作したものが独占的に利用している。



写真1
新たに建設された待ち伏せ台



写真2
木の上の待ち伏せ台

「足跡追跡猟」

*【事例2】【2006年3月26日】(直接観察)

筆者は、チューチャー氏の狩猟に同行する。1匹の犬もいっしょである。彼の持ち物は、銃のほかには山刀、バッグ、笛などである。

まず、5:13彼は徒歩で出発する。5:30車道から右に入る。5:37立ち止まる。野鶏の声を聞けないという。犬も来ている。5:52イノシシの足跡を見る。あたりは明るくなる。6:00笛をふくが野鶏がいるような気配はない。イノシシの足跡を読む。6:10イノシシの足跡見る。通行を妨害する木を切るために山刀を使う。6:22立ち止まり、笛をふく。6:30野鶏は鳴かないので、どうにもならないという。6:37竹林あり。6:46ヤブコギをして、見張りあり。ここには、サンパラン(栽培イモの根)があり。ここで、かつて2頭のイノシシを捕獲したという。7:00笛をふく。7:02ハチの巣を見つけ、ハチの子を食用にするためにそれをバッグに入れる。遠くのほうで、野鶏(カイパー)の鳴き声が聞こえる。7:07モンの墓あり。石を置いてある。7:15野鶏の声を聞く。かすれた声である。7:18道路に出る。7:26朝の入り口を通過。7:45村に着く。

以上のような【事例2】から、次の点が明らかになった。集落から猟場までは、徒歩で約25分を費やす。猟場は、かつて焼畑が行われていたところである。途中で、イノシシの足跡を見つけたので、そちらを追跡するためにヤブコギをする。猟には犬が使われており、犬は猟師の先を歩いていた。イノシシを待ち伏せするために、彼が植えたというサンパランは注目に値する。

「待ち伏せ猟」(聞き取り調査)

この猟は、畑の近くやしイの木近くの待ち伏せ台で行われる。その際には、上述したように2つのタイプの待ち伏せ台がある。この猟は、夜の8時ごろ出かける。そして、夜の10時すぎるとイノシシが現れることが多い。

「泊りの遠征猟」

上述したように、2-3人で行くことが多い。2-3泊する。

(2) 集団猟

「巻狩り猟」

【2005年5月8日】(聞き取り調査によると)

村から11人が参加をして巻き狩りがおこなわれた(図1参照)。

*【事例3】2006年3月26日に行なわれた巻狩りの様子

今回は、X氏がイノシシの足跡を見たことが集団猟のきっかけになっている。巻き狩の通達がすばやく各家にまわった。

3月26日の第1回目の狩猟は、おおよそ10:30～14:00頃にかけて行なわれた。参加者は、のべ20名であった。その猟の際には、幼獣1頭と成獣1頭の合計2頭のイノシシが捕獲された。幼獣が先に、地点Aで捕獲された。撃ったのはチョセンである。

イノシシの成獣は、地点Aにおいて包囲網を突破した。勢子と勢子とのあいだの距離は、約5～8メートルを示す。囲いの完成までは静かにする。そして、「オーイ、オーイ」と勢子が声を出す。

ソンボン氏が、276(地図略)のあたりから274へ声をあげながら降りていった。275で、チョセニが、1頭の子供のイノシシをしとめた。親のイノシシは、274のあたりから東へ逃走したので、みなで探しに行った。264の東側にイノシシが隠れたもようである。267のあたりでセンワーがいて、それを銃で撃った。イノシシに命中したがイノシシは逃走する。傷ついたイノシシをキチサほか3名が追いかけて、273でキチサがとどめをさした。なお、イノシシが見つからなかったため、ソンボンらが帰ろうとしていたところ、263のあたりで銃声を聞いた。しとめたイノシシは、ラオサーンの畑の出作り小屋で解体された。この出作り小屋を使ったのは、水が利用できたためである。

以上のような事例から、次のようなことが明らかになる。巻き狩の際におこなわれるイノシシの包囲網がづくられても、イノシシは簡単にそれを突破することができる。また、これらの狩猟活動は、標高差で30(?)メートルある山の斜面を利用しているものである。

【事例4】

2006年3月31日、ベンシドにて巻き狩りが行われた。2頭のイノシシを捕獲する。
参加者は、17名であった。

3) 獲物の解体、分配

2006年3月26日の巻狩りの際の分配の事例をみてみよう(写真3)。まず初めに、イノシシを最初に撃ったセンワー氏がイノシシの頭部と膝より下の脚の部分を手に入れた。これらの部分は儀礼に必要とされる部分である。残りの部分を23等分して、センワー氏が2、キチサ氏が2を手に入れて、それ以外の参加者はそれぞれ1づつ手に入れた。ソンボン氏の取り分は1で、約2キロだった。なお、銃を借りたお礼として、キチサ氏は自分の取り分(4キロと推定)から約1キロの肉を、銃の持ち主であるソンボン氏の父に分配した。

このように、集団猟の際には、肉の分配方法にある一定のルールがみられることがわかる。



写真3
捕獲されたイノシシ

4. まとめ

本報告は、タイ北部のミエン(ヤオ)の人びとが暮らす山村を事例として、熱帯における農民の狩猟活動の実態を把握することを目的とした。その結果、以下のような点が新たに明らかになった。

1) 野鶏猟では、村には野鶏を対象にした狩猟者が7名いる。狩猟方法では、笛か「おとり」(カイトーン)を使い獲物をおびき寄せた際に銃で撃つというのが一般的で、罠の利用は1名のみである。村内に使用されている銃は、散弾銃が中心である。その一方で、おとり用のニワトリを飼育している人は、村で5名がいる。しかし、彼らすべてが狩猟の際におとりを使っているわけではない。

2006 年 2 - 4 月における野鶏の捕獲地点は、集落から各方面にバラツキがみられるが、すべて約 2 km 以内に認められる。猟師は、集落からすべて徒歩で行く場合と一部オートバイを使う人に分かれる。また、各猟師別に特定の猟場(テリトリー)を持っているわけではない。自分の畑での農作業の際に、野鶏の鳴き声を聞いたのをきっかけにして捕獲した事例がみられる。さらに、1 人当たりの野鶏の捕獲頭数は 0 - 8 頭というように、狩猟者によって大きく異なっている。捕獲した野鶏は、オスが中心ではあるがメスの野鶏も含まれている。

2) イノシシ猟では、村には狩猟を得意とする者が 7 人いる。狩猟方法では、待ち伏せか足跡の追跡による個人猟か、巻狩りによる集団猟に分かれる。追跡猟には犬が使われている。2006 年 3 月 26 日の集団猟の事例では、参加者は 17 人が村人、3 人が村外の人から構成される。村人には 1 軒の家から 2 人でている家が 4 軒あり、猟にまったく参加しない家もあった。また、参加者のなかには、13 人が銃を保持して、7 人が保持していない。

イノシシを待ち伏せする見張り台は、畑の中か畑と森との境界につくられる。その一方で、かつて焼畑が行われていたところで、猟師がイノシシの足跡を見つけることが多く、やぶこぎをしながら追跡する場合が多い。また、巻狩りでは、幼獣 1 頭と成獣 1 頭の合計 2 頭の獲物が捕獲されるなど、2 頭以上が同時に捕獲されることがある。

以上のように、タイ北部の山地農民にとって、村の経済からみると狩猟の意義は小さいことがわかる。狩猟は、イノシシ猟のように農地に隣接する地域での害獣駆除で行なわれることもあるが、彼らの生業のなかに深く根付いた活動として主に農閑期におこなわれる。しかし、ここでは経済外的な意義に注目をしたい。とりわけイノシシ猟の場合、大部分の村人が参加するという社会的側面、捕獲後に儀礼がともなうという信仰的側面の役割など村のなかで多目的な意義を無視できない活動であると結論づけられる。

【注】

1) 中国雲南省のチノ一族では、野鶏をおびき寄せるための竹笛が使われている(秋道 2005: 135)。本稿の調査地では、金属製の笛のみしか使われていないので、両者の違いについては興味深い。

【謝辞】

本報告の現地調査は、当地において焼畑を中心とした農耕の環境人類学的研究をすすめている増野高司さんの全面的協力なしでは実現できなかったことを記しておく。

参考文献

秋道智哉 2005 「変貌する森林と野鶏」池谷和信編『熱帯アジアの森の民』人文書院。

池谷和信編 2005 『熱帯アジアの森の民』人文書院。

増野高司 2005 「焼畑から常畑へ」池谷和信編『熱帯アジアの森の民』人文書院。